

成人期 ASD 者の認知特性と社会不適応に関する研究

精神障害作業療法領域 池田 望 教授



Q. どのような研究をされていますか？

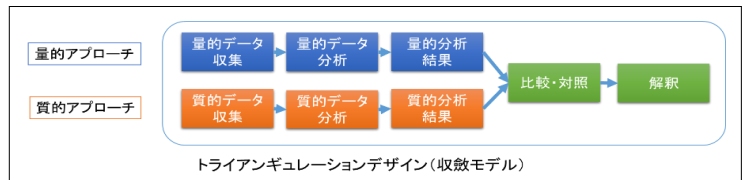
A. 自閉症スペクトラム障害（ASD）を持つ人は、幼少期は問題が顕在化せず、青年期に対人技術を要する就労等を契機として社会不適応状態となり、診断されることが少なくありません。不適応を起こす背景には他者理解の能力である心の理論（ToM）や表情認知などの社会的認知の障害、注意、記憶、前頭前野機能などの神経認知の障害が指摘されています。適切な支援の提供にはこれらの関連を明らかにしていく必要があります。また、支援には当事者である本人の視点が欠かせません。我々は、青年期以降の ASD における社会的認知の特徴と神経認知との関連、およびそれらにより生じる社会的な不適応状況について ASD 当事者の視点を含めて検討しています。

Q. これまでどのような研究をされてきましたか？

A. 青年期以降の ASD の社会的認知と神経認知指標、個別インタビューによる言語データから、認知的特性と、不適応を生じやすい社会的状況との関連を探ります。併せて、コミュニケーション・ギャップの実体験に関する ASD 当事者らのミーティングデータをもとに、定型発達への言及内容の分析から社会不適応要因を検証しました。量的・質的研究データの収集・分析・統合を含むトライアングレーションデザインを用いました。この方法は物事の本質を明らかにする上で有用とされています。量的な指標として前頭葉機能、心の理論、表情認知、原因帰属等を測定し、インタビューデータ中の認知・行動的特徴に関するデータを質的分析によりコーディングしました。前者は相関分析、後者は認知・行動的特徴を示す言語データの共起状況を分析し、両者を比較しています。ミーティングの言語データ分析には形態素解析により定型発達への言及を抽出し、内容の分類と検討を行いました。



表情認知の測定



Q. 将来の展望をお聞かせください。

A. 前頭葉機能と心の理論との関連は、言語データのコード「要領の悪さ」とコード「他者意図の認知が困難」の共起結果との対応が想定され、認知機能低下に関連する具体的な不適応状況が示唆されました。ミーティングの分析からは、ASD 当事者たちは論理的な推論 Reasoning の積み重ねを行っているのに対し、定型発達者の言動には相対的に状況依存性、好悪依存性、ナイーブ・リアリズム/シニシズムといった、illogical（非論理的）な問題が内在していることが判明しました。ASD 当事者が直面する社会不適応状況を議論する際には、定型発達者が日常行っているコミュニケーションのあり方との比較検証が求められます。

もう少し知りたい!と思った方はこちらへ

- 作業療法学科 精神障害作業療法学領域 URL
 ➡ http://web.sapmed.ac.jp/hokegaku/ot/ot_seishin.html
- 大学院保健医療学研究科 理学療法学・作業療法学専攻 精神障害リハビリテーション学分野 URL
 ➡ http://web.sapmed.ac.jp/hokegaku/g-ptot/g-ptot_rehabilitation.html